

# ふるさと、風

第118号 (2016年3月)

風に吹かれて (96) 白井啓治

・ひっそりと白梅の白さが流れておる

東日本大震災から間もなく五年の時が流れる。甚大な被害から立ち直ることが出来ていない現実がありながら、既にそこから学ぶことを忘れてしまっている人のなんと多い事か。

そういう私自身も思い出す時間がどんどん消えていき、学ぶことを忘れつつある。津波という天災に対しては、そこに生きる人たちの地道な努力で一步一步生活を取り戻してきている。

しかし、天災に誘発された人災はいまだに無残な姿をさらしている。いや、実際には拡大をし続けている。

先日の新聞に、神奈川県除染土保管に関する記事が出ていたが、福島原発事故の被害は収束どころか拡大の一途をたどっている。テレビには殆ど放送されることはないが、未だ未だ増え続ける除染土の処理も決まっていないのだ。百年、二百年か、さらにそれ以上なのかは知らないが、今のまま放置しておくつもりなのだろうか。計画の話は聞くが、現実には無策、手つかずなのだ。

そんな中、次々と原発再稼働を決めて、この先一体どうしようというのだろうか。東海村も再稼

働を容認しようという動きが活発化している。もはや政治的判断とは言えないだろう。政治的判断ではなく我欲的判断といふべきなものでもない。何人かの者が小銭を懐に入れたからといって、それが何になるかと思っているのだろうか。

こんなことを言うと、電波停止ではないがこんなちつぽけな会報でも停止を言う者が出てくるかもしれない。あまりにも情けな過ぎる今日の現実である。

人間の愚かで、悲しい性とでもいうべきものだろうか、少し力を持つと、全体最適を忘れ、我欲むき出しの部分最適に走ろうとする。ひとたび部分最適の視点に立つと周りが見えなくなる。そして、その事を好機とばかりに、僅かな小銭を得ようという者が両手を上げて集まり、ますます周りを見えなくする。しかし、小銭を得ようと群がる輩は、小銭がないとわかると自責を捨てて蜘蛛の子を散らすように消えてしまう。

昨今の国政議員の質の低下は目を覆いたくなるが、それはしかし私たちの責任である。多数決の原理に基づく決定では、私はそれを反対した、は免罪符にはならない。多数に決するの意図は、決した内容に関しては、それは総意である、が根本原則だからである。それ故に、議論することが重大なのである。議論を省いて数は力と錯覚しては

ならないのである。またそれを許してはならない。

さて、今月号で、菅原兄の掲載文が100号となった。8年4カ月欠かさず掲載したことになる。

菅原兄には、何時ももつと吠えて下さい、とお願ひしてきた。自分の声をしっかりと吠えねば何も変わっていかないからである。

この会報に声を限りにほえたかと言つて大きく何かが変化することは望めないが、黙っていたら何の議論も生まれなくなってしまう。

菅原兄には益々の大声で吠え続けて頂きたい。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年の5月号で丸十年を迎えます。当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「百号」になりました

菅原茂美

私は2007年12月にこの「風」の会に入会し、毎月投稿を続け、今月で私自身の第100号になりました。先輩各位は既に第118号となり、間もなく満10年・120号になります。

現在は会員7人でスクラムを組み、公的補助など受けず全て手作りで、本会報500部強を毎月発行しています。そして毎月誰一人欠ける事なく投稿を続け、その並々ならぬ努力に敬意を表します。

これまでの100か月を振り返ると、長かったような、短かったような…。正に無我夢中の年月でした。入会して私は、これまでの人生で出会った事のないジャンルの方々に接し、日頃の語らいの中で、多くの示唆を頂き、充実した年月を送る事ができた事を、心から感謝しています。

\*

さて投稿に当たっては、自己責任で自由奔放に何を書いてもよい。既成を破り、個性を前に出せ。

但しホラは構わないが、嘘は絶対にいけない：とのリーダーの指導の下に、単細胞の私は、これ幸いと、独善と偏見も顧みず、かなり乱暴な物言い続けました。すぐ脱線はするし、起承転結も全く無視。書くからには「広さ」と「深さ」が重要ですが、私はそのどちらも中途半端。プロではないが、今一、突っ込みが足りないのです。全くの「気まぐれ乱筆騒動記」となりました。

私は友人に会報を送ったら、いい歳をして、そろそろ吼え止まりにしたら…。少しは丸くなれ：と言われました。背を丸くして、庭の草取りでもし、花でも咲かせて好好爺になれというのか…。そんなのまっぴらだ。折角遠吠えのチャンスはい

ただいたのに、それを活かさぬ手はない。

イギリスの諺に「老犬は無駄吠えをしない」とあります。若者はギャーギャー騒ぐが根は浅く、思慮深い老人は、物事の本質を見極め、簡単に騒ぎ出す事はしない：という事なのでしょうが、吼えなければ世間は目を覚まさない事もある。

日本では、「沈黙は金・雄弁は銀」と謙譲の美德を讃えるが、賢く悟りきったようにしている：とでもいうのでしょうか。老人が吼える事で世の進歩に繋がる事もありうる。現今の、経済優先主義の妄想に幻惑され、民心の安らぐ暇のない世相に反省を求めて、私は精根の続く限り、吠えまくるつもりですので、あしからず。

そうはいえ私の書くものは、いつも会報の品位を下げる常習犯みたいで、迷惑掛け通してしたが、それにもかかわらず、長年お付き合いくださった皆様方に、心から御礼申し上げます。

そしてこれまで、100か月間に書きあげた内容を大雑把に分類してみますと、人類学関連24件、生物学（主に進化論）18、医学・生理学16、社会時評15、雑学11、災害関連7、動物学5、物理学5、政治・経済3、歴史2。以上106件（複数の月あり）でした。更に2013年5月から「短編コラム」を書き始め、社会時評16、生理・医学15、雑学7、災害関係5、他11件で合計54件でした。この100か月間に長短合わせて160件書いた訳ですが、乱暴でゴリ押しみたいな独善論に、よくぞ皆様、寛容の精神でお付き合い下さいました。心から御礼申し上げます。

\*

それにしても、長年懸命に書き続けても、文章は滑らかなならず、常にぎこちなさのオンパレー

ド。私は現役時代、試験や研究の論文は、随分と書きましたが、それが身に付き、まるで、木で漬（はな）を擗（か）むように堅苦しく、柔軟な形には進化できませんでした。尤もそこが私のコンセプトでもあり、今更、読者に、へつらつて美辞麗句を並べるつもりはありません。

更に、語彙の少なさは、弁解がましいですが、私は根っからの理系で、文学に疎く折角、世界に名作が溢れているのに、それを享受しなかったのは、正に怠慢の至りでした。真実は、文学など読む時間があつたら、自然科学の知識を多く受け入れ、永遠の課題「人間とは何か」の問題を、物理化学的に納得いくまで勉強したいというのが私の基本姿勢でもあります。私の本棚の9割くらいは、自然科学の本ばかりです。そして子や孫達が次々医学部に進学してくれた事は、私にとつて、この上ない喜びであります。幼い時から雑誌やテレビや散歩は自然観察を重点。草木や虫や小鳥が織りなす自然の営みを、一緒に観察したものです。

\*

さて、私の人生は、茨城県庁時代に、国、国会議員、他県、県議会、市町村、関連団体等から常に大きなプレッシャーを受け、言いたい事も云えず、重い石が、いつも頭に乗っかっている感じで、胃潰瘍になりそうな毎日だったわけです。何かのアイデアを出し、革新的な事をやろうとすれば、前例がない。予算がない。人が付いてこないぞ：と却下される。そして集票のため、議員とやらは、権力を笠に着せ、不当な補助金などを要求してくる。県民の納めた税金は、偏ることなく、平等に使われなくてはならない。私はある県会議員に脅かさねながら激しい議論の末、やっと納得してもらっ

た事例もあつた。守るべき家族がいなかったら、早々に役人など捨て去りそうな連日でした。

そうは云え、茨城代表として国の会議では重大発言を行い、法の施行規則を変更させたり、末端生産者を保護するため、頑張った事もありました。定年退職後も国の担当者から、相談の電話を受けた事もありました。しかし多くの時間は、胃潰瘍予備軍だったので。

それがこの会に入会したら、自己責任で「何を書いても良い」と言われ、まるで羽が生えたように自由飛行。誰に気兼ねする事なく、正に「筆こそ命。毎月ラブレターを書くような気持ちで、せっせと投稿。私にとって、人生の大革命でした。

\*

人生の総括ではないが、過去を総ざらいすると、かなり波乱万丈の人生でした。私の職業は獣医師です。長年県庁及び出先機関で、家畜衛生に関する業務を遂行してきました。具体的には、家畜伝染病の予防及び蔓延防止。それに畜産奨励振興事業です。1995年定年退職。後、社団法人専務、農業大学校教諭、国際協力事業(外務省嘱託)で、中米派遣。県嘱託で、食肉衛生検査など、定年退職後20年を頑張ってきました。

一方、茨城県の農業生産高は北海道に次いで全国第2位。そのうち畜産の占める割合は、ほぼ3分の1。産業動物は利益を産むために飼育するもので、狭い所にギューギュー飼われて運動も少なく、高カロリーの餌を詰め込まれ、乳肉卵を低コストで生産するため、病気になる方が無理。思い出しても、多くの家畜疾病に遭遇しました。ソロバンをはじいてプラスにならないければ、廃用にされる動物を見るのは本当に辛いものです。動

物を健全に生かす事が、獣医師の本命なのに、途中で処分とは真に心痛の至りです。また経済動物と言つても、飼育者にとって家畜は家族同然。それを悪性の伝染病などに感染したら、法律で命令殺。補償金は出るにしろ、生産者と行政の板挟みで、心痛この上ない長い年月でした。

\*

家畜伝染病というものは、いつでも何が起るかわからない。私が県に入ったその年、昭和34年に何と世界で初めての牛の流行性感冒。後に「イバラキ病」と命名された超悪性の伝染病が、突然この茨城で、世界で初めて発生したのです。農耕用として一家に牛1頭が買われていた時代に、軒並み何千頭も牛が死亡したのです。

更には、日本で初めての「豚水泡病」(猿島)、「豚パルボウイルス感染症」(石岡市三村で昭和44年、私が発見に関与)等が、どうした訳かこの茨城県で初発したのです。日頃、繊細な目でサーベイしていなければつい見逃し、たちまち蔓延。被害甚大となり社会問題となるのです。動物に関しては、土日も盆正月もない。深夜に及ぶ事はいかほどあつた事やら。目立たない縁の下の方持ちちとはいえ、俺たちが日本の安全な食糧生産の一端を担っているのだと、誇りにも感じていました。畜産農家は、日本人の栄養改善・体位向上に貢献している最も重要な食糧生産者です。「大和魂」だけでは、スポーツの覇者にはなれない。

日ハムの大谷選手を見ると、日本人の体位も立派になったものと、しみじみ見惚れてしまいます。国際会議場で、日本の高齢政治家の足が短いのはやむを得ないとして、もつと良質タンパク質を多く摂取し、若い世代が世界と肩を並べて、見劣り

しない体位が普通となる日を、強く希望します。

\*

さて、家畜伝染病に関し、重要な事は、自分の飼っている家畜は、俺のものだから、俺の自由にさせてくれ。とはいかないものです。なぜなら、法律を犯し、予防注射義務(金も時間も多大)を遂行せず、何か伝染病でも発生したなら、被害は、その飼育者一人で止まるものではありません。移動禁止や出荷停止など、蔓延防止のための法規制にかかるので、他の同業者に多大の迷惑をかけるからです。動物を飼うという事は「公共性」が、非常に強いのです。

人畜共通感染症であるペットの「狂犬病」も、犬には狂犬病予防注射が法律で義務付けられています。長年予防注射など、対策が確実に実行された成果で、現在、犬の狂犬病は日本で発生していません(人では海外帰国者に時々発生あり)。日本と大洋州を除けば、世界中の殆どの国で狂犬病は発生しているのです。従つて海外旅行など、旅行会社は、狂犬病予防注射など受けなくともいいよ!などと客集めしていますが、狂犬病はネコ、コウモリ、狐、狸、スカンク、アライグマなど、殆どの哺乳類に存在する伝染病なのです。勿論人間も感染したら、残酷な死に方をするので。

【特に私が心配しているのは、北海道旅行すると、ロシアの漁船が入港した時、同乗している犬が、船員の後に付いて上陸している姿をよく見かけます(ロシアや中国は確実に狂犬病が存在しているが、その実態は不明)。もしその犬が、狂犬病の潜伏期間中であつたら、まだ発症してないので分らず見過ごすと、たちまち国内に狂犬病が侵入する事になるのです。狂犬病は治療法がなく、

感染すれば殆ど死を待つよりないのです。狂犬病にかかった人間の映像を見た事がありますが、それはそれは正に、地獄絵図そのものです。

犬は必ず動物検疫所を通らなければ入国できないのです。見かけぬ犬が北海道でかなりウロウロしている現状は、真に憂慮すべき事です。

犬を飼っている皆さんは、国民の安全のためにも、少なくとも狂犬病予防注射率80%を維持するように、くれぐれもご協力願います。病気もないのに予防注射を義務付けるとは、獣医師の金儲けのためか…などと言う人がいますが、病気が入ってからでは間に合いません。過去に何度も見てきた社会現象は、一旦病気が流行し、ワクチンが不足がちになると、普段予防注射を怠っていた人に限り、変な権力者などを連れてきて、自分の注射を真っ先に行うよう強く要求する。自己中の実に呆れた人種です。現在の日本の狂犬病予防注射率は50%未満と推定されますが、これでは流行は防げません。理想は100%ですが、80%あれば流行はなんとか防げるので、ご協力願います。】

＊

さて、世の中は、義務を果たさなかった人に限って、何か不都合が起きると、すぐ行政のせいにし、訴えてくるもの。私は現場時代、豚コレラが流行したのは行政の対応が悪いからだ、警察に訴えられた苦い経験があります。生産者の後には、票集めに腐心する、議員がへばりついており、それが行政に圧力をかける事を仕事みたいにしてる人がいました。立法府が法律を作っているのだから、その適正な運用にも全力を入れてほしいもの。それが自分の支持者を大事にするあまり、無法な要求をするような低レベルでは、法治国家

が泣きます。それもこれも、そんな国会議員を、当選させた選挙民に責任があるのです。

先の豚コレラ提訴の件ですが、私は警察の取り調べ室で、1年間に11回も発行した、自作の予防注射推進啓蒙リーフレットを持参し、「これでも行政の対応が不備だったのでしようか」と食い下がった。すると警察は「わかった」とすぐ釈放してくれました。何でも訴えて、勝てば丸儲けみたいな社会現象は正に世も末。

何事につけ、権利を主張するなら、しっかり義務を果たしてからにしてほしいもの。法に従って、しっかり予防注射など義務を果たし、ろくに税金も納めないで、あれこれ要求ばかりするのは、いかなるものかとしみじみ案じられます。

日本人の2%近くが生活保護を受けていますが、勿論大部分は、やむを得ない人達なのだろうけれど、働けるのに働かない人は、多すぎるのではありませんか…とやりたい。

＊

さて私がこの「風」の会へ入会した動機ですが、2007年10月、第17号会報で、本会の重鎮打田昇三先生が、石岡市の「有形文化財」の「風間阿弥陀」について記載され、それを見た親戚が私に知らせてくれたのがきっかけでした。風間阿弥陀は、常陸風土記にも載っています。私の妻の母が生まれた屋敷にあったものです。事情があつて、市の歴史資料館に移転し、現在、資料館で管理(兼平会員様)して頂いています。

「風間阿弥陀」は、常陸大塚家の分家にあたる旧協和町にあった「小栗城」の守り本尊と言われていました。小栗城は1155年、桓武天皇曾孫・高望公から7代目、平重家により旧協和町に築城

され、1423年、14代目平満重の時代に、足利持氏に攻められ落城。満重と十勇士の家臣団が、三河の縁戚を頼り逃げ伸びる途中、十勇士の一人

「風間次郎正興」が、阿弥陀像とともに、幼い孫(風間家4代目「正三」)を旧千代田町下志筑別所に預け、養育を常陸大塚家に頼み、正三は長じて大塚家の武将となり、旧石岡市土橋町に居を構え、屋敷内に「風間阿弥陀」を祀り、地域の信仰も得ていたと言われます。風間家の直接跡取りではないが、その子孫である風間家第19代目に当たるのが、私の妻です。これらの経過は、打田先生の紹介文と、風間家の古文書が、ほぼ一致しています。

そこで私は、「風」の会を訪れ「風間阿弥陀」移転の経緯など説明し、色々歴史談話を続けているうちに、入会と投稿を勧められ、2007年12月、第1稿「狼へのレクイエム」を投稿した次第です。なお、小栗判官平満重と「照手姫」との恋物語は、スーパー歌舞伎の市川猿之助が1991年、新橋演舞場でロングラン上演しました。

＊

なんかしら、人生の総活が、愚痴のオンパレードや、自慢話みたいになりましたが、これも長年の鬱憤の総ざらいと、お許し願います。

最後に私が終始一貫して述べたい事は、人間も自然の一部に過ぎない…という事です。特別の存在でも、神がかつた崇高な生物でもない。偶然の進化の過程で、現在の人類が存在するという事です。ケンカばかりして急速に偽文明を進化させ、母なる地球を汚染し、生物が住みにくい環境を続ける事は、それこそ、神を冒瀆する事です。

## 地域に眠る埋もれた歴史(12) 木村 進

### 常州牛堀と横利根川(二)

牛堀地区は現在潮来市となっておりますが、手前は行方市麻生地区です。この地区を水郷潮来と少し区別して眺めてみました。霞ヶ浦水運で風待ち港として栄えた町としてとらえると、現在の牛堀地区も愛おしい気がしてきます。

### ○ 権現山公園

この牛堀の裏山に権現山公園という桜の名所があります。ソメイヨシノの木が250本ほどあります。この公園に行ったのは、まだ桜は1分咲き位の時でした。これから桜が満開になると、ここからの眺望とあわせてとても素晴らしい場所だと思えます。ここからの眺めは手前に牛堀の町が、その先に「北利根橋」。そして常陸利根川と霞ヶ浦が見えます。

対岸は常陸利根川と利根川にはさまれた中洲で千葉県香取市になります。

### ○ 二熊野神社

権現山の麓に牛堀地区の鎮守と思われる古い神社があります。私は公園側から降りていきましたが、牛堀地区の家並み側に鳥居があり、すぐ牛堀の船着場があった場所に近い場所です。この神社の裏手が権現山です。

そして反対側は牛堀の街と常陸利根川(北斎公園)があります。ここでは、毎年10月に勇壮な山車祭りが行われます。この祭りにはこの牛堀地区だけでなく、となりの麻生町(現行方市)や千葉県香取

市などの山車も参加しています。

この三熊野神社はこの権現山に熊野権現信仰として祀ったものだと思います。

霞ヶ浦の水運が発達し、蒸気船(通運丸、銚子丸など)が通るようになると、ここには牛堀河岸が作られ、水産業の間屋や、佃煮の加工業者などが多く集まった場所です。この三熊野神社の歴史などはよく調べていないのでわかりません。しかし、熊野信仰が盛んになった江戸時代になって、小さな社をまとめて建てたのかもしれない。本殿は覆われていて内部はよく見えません。比較的新しいようですが、立派な本殿です。境内には樹齢350年程の大イチョウの木があります。また江戸時代の庚申塔などが数点置かれていました。風待ち港であった常州牛堀の中心となった神社だと思えます。

昔の港近くから神社の参道が続いていました。

### ○ 牛堀諏訪神社の板碑

潮来の牛堀地区を散策していたら、少し変わった物を見つけた。旧街道沿いにある「諏訪神社」の境内です。道路のところどころに大きな石の鳥居と奥に拝殿が見えます。拝殿の裏に本殿があります。特に変わったこともありません。

応永7年の「阿弥陀三尊種子板碑」です。

前につくば市北条を散策していた時に見つけた「毘沙門天種子板碑」のことが懐かしく思い出されました。そう「種子」は梵字のことです。

応永7年という西暦1400年だとか。室町時代です。北条の板碑は鎌倉時代ですからこちらの方が時代は後になります。それでも古いです。こうやって見知らぬ土地に初めて来てあまり知

られていないものが見つかると嬉しくなるのはどうしてでしょう。書いてある文字はよく読めません。関ヶ原の戦の200年も前のものがこんな神社に置かれているのです。

このような場所ですが、境内は綺麗に枯れ木などが片付けられ、掃除されています。

### ○ 長国寺(島崎氏菩提寺)

潮来の牛堀地区の旧道沿いを潮来の方に少し行くと「長国寺」という曹洞宗の禅寺があります。この長国という名前は戦国時代までこの地を治めていた行方四頭の一人島崎氏の島崎長国の名前からつけられました。ここは島崎氏の菩提寺です。

大掾氏の一族で行方地方に進出した景幹の4人の子供が行方四頭(小高氏、島崎氏、麻生氏、玉造氏)となり霞ヶ浦北側と北浦の地域を鎌倉時代から長い間支配してきました。次男の島崎氏が領した土地がこのあたりにあったということのようです。

島崎氏の城はもう少し北側の山の麓のお札神社がある辺りだという。しかし道もせまくあまりこのあたりに行くこともない。機会があればいつか行って見るつもりだが・・・。

島崎氏は400年ほどこの地を領していたものと思われる、兄弟分の隣の麻生氏なども戦になり勝っている。しかし最後は佐竹氏の南方三十三館の領主皆殺しで滅び去った。

江戸時代、小川(小美玉市)に水戸藩の稽医館(いいかん)という医学の研究所があったが、ここに本間道悦という医者がいた。

そして小川(小美玉市)の天聖寺の墓地にこの本間家の墓と芭蕉の句碑があるが、この本間家一世の「本間道悦」の墓がこの長国寺にある。

松尾芭蕉と交流のあったという本間道悦は潮来の医師で、芭蕉に「医术免許状」を書き与えたと伝えられる人物として知られ、芭蕉の鹿島紀行でも鹿島詣での帰りにこの道悦のところに宿したと思われる。(「帰路自筆に宿す」と書かれている)昔は潮来と言ってもこちらの牛堀方面にこのような著名人がいたのでしよう。

寺の入口山門を入ると両側にたくさん石灯籠が並んでいます。灯籠沿いの道を少し進んだところに戒壇石柱『不許葷酒入山門』(文政十二年(1803)建立)がおかれています。

なかなか立派なものです。

正面に本堂があります。大興山長国寺の本尊は聖観音。島崎城主第13代島崎長国が文明2年(1470)に創建したとされ、永正年間(1504~21年)に現在地に移建しました。しかし火災で伽藍は焼失し、安政2年(1855年)に再建されました。境内に樹齢約400年のイヌマキの木があります。

### ○ 観音寺

「瑠璃光山観音寺」(真言豊山派)といい、寺伝によると徳一法師が大同2年(807年)に開創したとある。

徳一法師の寺は山や高台が多く、このあたりにもあったのかと少し不思議な気がする。筑波山周辺や会津には多くの寺が残存しているが、その他の地域にも多くが徳一法師(法相宗)の創建がかかっている。その多くが大同2年なのだ。

この本尊は聖観世音菩薩で、その他に薬師如来と不動明王を祀る。

創建当時は上戸(この近くにある)の尾の詰(おのづめ)という場所にあったが、観応2年(1331年)に

藤原国安により現在地に移されたという。

この「尾の詰」という地名が何処から来ているのかが分からないが、尾の詰⇨小野住 となつて、ここにも小野小町伝説がある。寺の境内には小野小町の植えたと言われるしだれ桜の三代目の木があります。小野小町が眼病を患い各地を回り、この観音寺に百か日の参籠をして全快し、そのお礼にしだれ桜を寄進したと言い伝えられています。このように眼病やイボなどと言う話が各地に伝わるのも面白い。石岡の八郷地区に小野越の北向観音に伝わる話とも似ている。山を越えた土浦市の小町の里も同じような話だ。



山門…寛政年間(1789~1802)に建立(四脚門、茅葺、妻入、市指定有形文化財)

薬師堂…弘治3年(1567)に建立(三間四面、寄棟、茅葺、県指定重要文化財) なかなか立派な見ごたえのあ

る薬師堂です。

茅葺屋根の薬師堂と手前のしだれ桜、裏手の竹林がすべて美しく調和しています。

屋根は釘を用いず、四方から中心に向かって集まる垂木を一本の梁が支えている格天井様式だそ

### ○ あじさいの杜(二本松寺)

この二本松寺が「あじさいの杜(もり)」として整備をしたのは比較的最近のことだと思ふ。場所は牛込地区に近いので牛込に分類した。

でも潮来の紫陽花寺として知られるようになってきた。とても大きな寺で駐車場も広く取ってあります。「あじさいの杜」と書かれた看板にしたがつて下の方に降りて行きます。



一旦下に降りてこの山を廻りこむように、山の斜面に一面に植えられたアジサイは種類が豊富で楽しめます。

この下ったところの右手は学校(牛堀小)があります。そして下には田んぼが広がっています。二本松寺は少し高台にありその山の斜面を利用して約200本の紫陽花が植えられています。これからも増やしていきたい1万本の紫陽花が咲き誇る寺にしたいと始めたようです。

寺への上り道の途中にもたくさんお紫陽花が植えられています。

天台宗羽黒山覚城院二本松寺。本尊は薬師如来。平安時代の初期824年頃に慈覚大師円仁により茂木に建てられたとされ、行方四頭の二男である

島崎氏が島崎城を築城した時に京都比叡山を模して鬼門の位置にこの寺を配したという。それから400年間島崎氏の祈願寺として繁栄しました。

島崎氏が佐竹氏に滅ぼされた後も寺は佐竹氏、水戸徳川氏に守られてきたそうです。この辺りは島崎氏の領地だったので。寺の裏手に着くと「水戸光圀(黄門)公お手植えの榎」の巨木があります。1691年に本堂を改築した時に植えたものだそうです。

#### ○ 夜越川 (よろこしがわ)

牛込地区の少し潮来川に霞ヶ浦に注ぐ夜越川という川があります。名前の由来はよくわかりませんが、風待ち港である牛堀と船舶の中継地である潮来との位置関係と何か関係するのかもしれない。潮来から夜中に牛堀に来て牛堀野朝早い船に乗る。などということもありそうです。しかし、一説には大塚氏一族長山氏の居城であった「長山城」が大永二年(1622)に同じ大塚氏同族の島崎氏に攻められ落城した。この時に島崎氏はこの川を夜越えて攻めてきたそうだ。そこからこの名前になったともいう。

時々この川を牛堀から銚子に向かう時に越えるのですが、2羽の白鳥が泳いでいます。そこで川沿いに少し歩いてみると、鴨たちの水鳥もたくさんおりました。また橋の下には古びた小舟が数隻おかれていました。霞の郷ののどかな風景がこんなところにも見ることができました。

#### ○ おわりに

この常州牛堀も潮来市と一緒に潮来に比べると陰に隠れたような存在かもしれませぬ。しか

しここにしかない風情が今も残っていました。これらは実際にその地を訪れてみて自分の目で確認し、感じてみなければわかりませぬ。北斎や巴水の描く版画の世界は独特です。

現在この世界を感じることでできる場所は少なくなっていますが、この水辺を歩きながら過去を振り返って見ると、やはりここにしかない世界がありました。

そしてこのような所はこれからも、大切にしていかなければならないという思いが強くなりました。

潮来の華やかさは無いが昔の霞ヶ浦の風情を感じるにはこちらの方が勝っているようにも思います。

#### 何を求めて(2)

伊東弓子

今回も何を求めて行くのだろうか。過去への旅か。現実からの逃避かと自分に問いながらも足は遠く古渡へと向いている。

愛郷橋の所で電車を見送って、その後土浦から江戸崎へと向かった。三カ所でそれぞれ一時間以上待ちながら大部時間がかかった。遠くへ行く時は、その地の状況も分からないのだから早めに出て行かないと不味いことを改めて思った。

江戸崎の町で「桜川行き」のバスを待っていると、一緒にバスに乗るだろう男の人が、

「今日あたりは稲刈りが始めたよ。浮島の方も一面黄色くなって奇麗だったよ。浮島と田浦の間の川は水がきれい、魚も沢山捕れた。今夜は花火がある。人も集まってきて町が賑やかになるぞ。楽しみだ」

とこの周辺の話しを聞きながら行く先に思いを

馳せた。

本当は降りたい古渡も素通りして行く。「玉里御留川運上入札他領蝸蝸文」の東回りは浮島へ行き、そこから川添いの津に廻っていった。川添いは帰りコースという気の緩みからか、居眠りが多かった。広く平らな所を走っている、現代の建物が多いと夢現の中で「向町、光葉中央、幸田、大橋、粉名口、市役所、仲河岸」などの停留所をメモしていた。停留所には土地の名が残っているのを楽しみなのだ。

佐原では歴史や文化を感じる間もなく走るように川添いに行くバスに乗った。先生や仲間と何度絵図を広げ、箕和田御留川周辺への思いを寄せたことか、いよいよこの眼で見つけていくことになる。

西代、上西代、どんな津頭がいたのだろうか。

八筋川、あちこちで稲刈りをしている。大型ライスセンターもある。大きな枝垂れ柳の原木があった。水辺の名残の一本だろうか。運転士さんは始めて江戸崎から古渡へ来た時の人だった。今日も土地の話しをしてくれた。

「右は横利根川だ。本新第五とあるが、この辺は運河だよ。田の配水を霞ヶ浦へ流している。境島から浮島辺りは霞ヶ浦の底だった所だそうだ。山形、富山の方から来た人達が三々四代頑張っているが、今があるそうだ」

新利根川の稲敷大橋を渡ると浮島だった。浮島の名の付いた停留所、現代の施設、観光地も多かった。浮島直売所、コンビニ浮島、そこを進むと右は浮島、左はあんばの看板がある。対称的に右一帯は水田地帯、左は畑、小高い森。和田公園、浮島郵便局、この近くの森に天皇の妃の話があ

るとのことだ。浮島中央、この右の家はそうしを書いた人の家だというが、そうしとは何のことかな。前蒲、戸崎があった辺りで戸崎、前蒲という名が残っているようだ。

廻状を預かって東まわりの出発の浮島の庄屋の家は今もあるのかな。

松川、野中、古渡小学校前、あちこち田が黄金色だった。玉里の方ではまだ色づいてはいない。バスでは津頭の存在していた村々を訊ねるのは難しいことだ。三分の一も確かめられたかどうかわからない。が、満足な気分では江戸崎の町へ降りた。戸張が降りる頃には花火も始まるだろう。この人ごみの中にあの女の人はいるだろうか。否、夫を捜しに来る人だ、物見遊山では来ないだろう。

古い店に入ってやっと休息、考えてみたら水も飲まず、メモを取る事に夢中、景色に夢中、運転手さんの話に夢中だった一日。和ずしを注文して幸せと懐かしさを味わった。夏の終わりに先生が教えて下さった地を訊ね、母の作ってくれた寿子を思い、花火に送られて土浦に向かった。それにしても絵図にあった浮島が台地に繋がってしまった事に改めて驚くと共に本当に人間の幸せになつたのが不信と残る旅だった。

第四回目の九月は顎を怪我して行かなかった。悔しい出来事だった。老いていく顔に己から傷を作ってしまったのだから。

第五回目の十月は、一寸変わった形で出かけた。会のリーダーである先生方が「玉里御留川」の本が欲しいとのことで三冊用意しておいた。この会に行く切っ掛けを作ってくれたSさんが乗せて行ってくれるという。どんな人かという好奇心もあって待っていると赤い車が目の前に止まった。二

人乗りの背の低い若者向きの車には驚いた。お話し好きの人とは分かっていたが、想像していた印象とは違った。慣れた道なのだろう。近道を行くようだ。飛ばして行く。小野川の東の橋から町に入った。大人は勿論、若者、子供も二十人以上だろうか、五、六人づつ五回に分かれて舟に乗った。私は五回目に乗ったが、帰り時間、向かい側の岸の土手下に真珠の養殖の仕掛けが目に入った。取れた魚の種分けをしながらか話しているのを耳にした。

「水が汚れているから取れないな。はくれんはここではこんなに小さいよ」

「流れが変わったから取れなくなった。さいし島の方でうごいは・・・大きいぶなは・・・」などはつきりは聞こえない。

そしてアメリカカナマズ、タイバス、大陸バラ、大タナゴ、タナゴ、うぐい、鮎、えび、タモ、ロコなどの名前が出ていたが私にはわからない。何か忙しい人だった。その人も田舎くさい婆さんだと思つたことだろう。

十一月は上天気だった。大仕事も済んだ後なので気分も爽快。歩いて土浦から木原迄行く決心をしてお発だった。

「土浦」の漁場は昔広く、大きな津だったろう。

高校時代、町中の通学路の途中に大きな川魚の店が並んでいた。川が町の中を流れ、お婆ちゃんの実家の寺は川から引いた水が土間の所を流れていたことが、思い出される。桜川を渡る手前で、終戦前の常磐線の事故で亡くなった人の碑をお詣りする。義理の弟のお父さんの名もあった。

小松に川があり、船渡橋という名の橋があった。左側は埋め立てたのであろう団地が連なつて、右

は蓮田が広がっている。空は青くそこに筋雲が描かれているようだ。

「大岩田」にも漁場があった。なるべく旧道を行つて偲んでみたい。一本松、大屋敷、神社がある。土浦第三高等学校下辺りで、歩いている人が教えてくれたには、この台の上に住んでいる人達が漁をしていたとか。今でも漁を続けているとのこと。聞きに行く時間も欲しい。露地の野佛が欲張らずにと言っているようだ。

花室川に出た。運動公園や食堂、魚屋もある。神社、供養塔もあり人の多い地域のようだ。サイレンが鳴っているから昼だろう。子供会の広場や集会室があつて神社に続いている。そこを登つて降りると霞ヶ浦高等学校の前に出た。いつの間にか道は一本になり、旅館もあつた。

阿見坂下を通り過ぎると「廻戸」も漁場のあつた所、古い家が続く。大きな大工店、廻戸共同作業所、集荷所、子供会の建物もある。

「大室」も漁場のあつた所。大きな屋敷やお堂がある。塵出しをしていた女の人を見た。一瞬驚いた。頭の上の方はでんすけおじさんのようで、下の方は王さまのようにカールを巻いたような髪だ。一瞬はつとした時、若い女が先を越して寄つていった。

「どうしましたか、家の嫁も髪がなくなつて悩んでいます」

二人は何か話しているようすで、私の割り込むすきもなかった。

「もう恥じることもなくこのままにします」とすてきな洋服姿で、庭の方へ行つてしまった。若い女の人は首肯しながら先へと歩いて行く。今回初めてあの女の人を見た。私の一足先を古渡へ



向かっているのだろうか。

竹来下辺りは、蓮田も多い。店締いしたうどん屋がある。

島津も漁場のあった所。出島の半島が長く水に姿を置いている。

掛馬。ここも漁場のあった所。登り坂を行くと、又新しい世界をみつけることだろう。静かな家並みが続く。田の大半は防衛庁の建物に遮られて水辺は見えない。ダンス教室があつたり、清魚という看板がある。漁の盛んな頃の名残のようにも思える。この辺りの繁華街なのだろう。大きな家のご主人が舟溜りがある辺りは昔の漁場じゃないかと聞いたと教えてくれる。

波間戸も漁場の一つ。静かで落葉が多い。庭先にいた奥さんと話していると、この地区に漁師がいるとのこと。矢田部から嫁に来て、漁のことを知らずに苦労したという。今は農も漁も機械になったからやめたという話をしてくれた。八坂神社、上州屋、飯島商店、白壁の大屋敷などゆっくり歩きたかった。

新屋敷、いけん前などの停留所があつた。

上舟子、下舟子も漁場だった所だ。大木の檜、

舟作というそば屋も興味があるが寄道せずに進む目の前何も邪魔するものもなく水辺がよく見える。山一団地、福祉センター前、東洋大付属牛久高校入口を過ぎて三時十分木原に着いた。町は下り坂になっていく。漁場は左に降りた田の付近だ。昔造りのラーメン屋で質素なラーメンに舌鼓し、疲れを癒した。木原には友がいた。若くして亡くなったので一度はゆっくり訊ねたい所だったが、今回も急ぎ足に帰ることになった。

古渡に行った人からの知らせは、公魚が少し取

れただけだそう。台風の後で漁がないそう。

こんなものじゃ、首つりだと川岸屋のご主人が嘆いていたと聞く。十リットルバケツに一杯にもならない不漁続きとの報告。

私の旅は今回も漁の話しを聞くこともなく実態を知ることにはなかった。地名は確りと確かめ、漁の面影を残す話だけだった。自然消滅かなと感じる旅だった。

## 第十回いしおか雛巡り

兼平智恵子

完成真近い改修中の石岡駅の壁面に茨城のシンボル筑波山の姿が描き出されました。

・二日路は筑波にそうて日ぞ長き  
これは正岡子規が水戸にいる学友を訪ねて明治二二年四月、本郷を出発し、藤代に一泊、二日目は石岡の萬屋旅館（現カギヤ楽器店隣）に宿泊し、この句を残し、水戸へ向かいました。このように石岡の地からは、ほとんど美しい姿を望む事が出来ます。

この子規の句、二日路の碑は、石岡の歴史を愛する会の皆さんよって金刀比羅神社の境内に建てられました。ここからも筑波山は美しい姿を見せてくれます。特にお勧めは直ぐ横にある灯籠の窓から覗きますと小さな筑波山が現れます。そして夕日の筑波山は金屏風を背に女雛と男雛とほほ笑ましい姿にもなります。こうして美しい筑波山を望むことの出来る石岡の駅に何故筑波山なのでしょうか……。

もし常陸国府の国庁の想像図であつたなら……

もし常陸国分僧寺、尼寺の想像図であつたなら……、もし常陸国分僧寺の中門跡に一五七四年に建立された仁王門（明治四二年の大火で焼失）が描かれたなら……、「歴史の里いしおか」は子孫孫継承することなく語り継がれていったことでしょうか。残念でなりません。

梅の蕾がまだ固い頃の二月十三日（土）から三月三日（木）まで八四軒の参加店によりいしおか雛巡りが開催されました。

「おかえりなさい……いしおか あたかなまち石岡」のうたい文句のとおり雛様たちは「おかえり」と待っているかのように各店内に飾られてありました。しかし常設展示場である、まちかど情報センター、まち蔵 藍、みんなの広場では、沢山の雛様やつるし雛が美しさとあいらしさを誇っていました。航海守護や開運の神として信仰されてきた金刀比羅神社には雛様達が船に乗って航海中の様子が飾られてありました。

また昨年四月にオープンしましたふるさと歴史館ではめずらしい掛け軸に描かれた雛様絵が六幅、大正から昭和初期のものと思われ、描かれている女雛、男雛の位置が関西風になっているのが注目でした。

恒例のまちかど情報センターの歴史絵巻情景飾りでは在原業平と陽成天皇の一行を、常陸の国から迎えにきた龍神山の龍が、静かに、しかし風のように舞い上がり、一瞬にして常陸国へといざなつた。まずは常陸国の国人との花見の宴をはじめ、山では歌垣のさなか、ふもとの流れる川に沿い、曲水の宴が宴たけなわ……。雛様たちの見事な演技の春の情景。

そして紅葉の美しい秋の情景は新嘗祭たけなわ。

役柄に徹し、表情に現れている事が不思議であり、職員皆さんの演出に大拍手です。

一説では陽成天皇は、業平の子どもではないかといわれ、天皇の幼少期には和歌などの皇族の教養を教える家庭教師のような存在で親しく親子に接していたとも想像されると言う。

九歳で天皇になりましたが病気のため十七歳で退位させられ、その後六十年以上を上皇として過ごしたと言う。

筑波嶺の みねより落つる みなのか川

恋ぞつもりて ふちとなりぬる

陽成院は筑波山にきたことがなく想像で歌にしたようです。

今年も工夫した素晴らしい情景をありがとうございました。職員の皆さん商店街の皆さんお疲れ様でございました。

・きょうは春 明るい色にしよう

智恵子



お別れ

小林幸枝

二月二十七日の朝、愛犬のリラちゃんが永眠した。今、悲しみが体中に駆け巡っている。

九年前のこと。激しい雨の時、洗濯機の隙間に震えて蹲っていると、物凄い大きな洗濯機の隙間から出てきたとき、

ドブネズミだと思ひびっくりした。

よく見ると子犬だった。汚れて痩せていたので、ネズミだと思ってしまったのだ。その子犬は私の目をじっと見て、助けて、と訴えていた。私は、家にはもう家には三匹いるからダメ、と首を振った。そしてそのまま家に入った。

家に入っても痩せた子犬が頭にこびりついて離れなかった。

「雨が降っているのに家に入れてやればよかつたかな。あちこち迷って洗濯機の隙間を見つけて来たのかな。痩せてたから、お腹を空かせているのだろうな」

色々思い、また戻ってみた。子犬は洗濯機の隙間に戻って震えていた。それを見て私は、声をかけてしまった。子犬は、小さな尻尾を千切れるほど振って出てきた。雨に濡れた体は冷たかった。私は、大慌てにタオルで体を包んで家にいった。

汚れた体を風呂で洗って、ミルクと餌をあげると、ガツガツと直ぐに食べ終わった。余程お腹が空いていたのだろう。

父に話をする、飼うのはダメだという。でも甘えていく子犬を見て渋々許してくれた。名前をルリとつける。母もとても可愛がってくれた。

洪っていた父も、だんだん可愛がってくれるようになり、他の犬たちとも仲良くなって、我が家の家族となった。

成長すると立派な番犬になってくれた。

二年前に、急に痩せてきて、動物病院に診せたら脾臓に腫瘍があることが分かった。病氣と闘ってよく頑張ってくれた。

今、きつと天国で一緒に遊んだトムちゃん、ポピーちゃんと再開し、楽しく遊んでいるだろう。

一緒に暮らした九年間を忘れないからね。

## 【風の談話室】

### 《読者投稿》

私の国府巡り「古代の旅」

京都府精華町 今井直

学生の頃、誰もが日本史の試験前に、年号を語呂合わせで覚えたことがあるだろう。よく知られたフレーズに、「本能寺の苺。パンツ」がある。本能寺の変・一五八二年だ。「大火に驚く虫五匹」大化の改新・六四五年。「大化の改新」蘇我氏滅亡」と思っている人が意外に多い。正確には少し誤解である。

推古天皇の摂政・聖徳太子が薨去すると、蘇我入鹿が権力を握り、のさばるようになった。太子の子で皇位継承が有力な山背大兄王まで、死に追いやってしまう。危機感を抱いた中大兄皇子と中臣鎌足が談合し、あるうことか板蓋宮(いたぶきのみや)大極殿で、しかも皇極天皇の目の前で入鹿を殺害した。この事件は「乙巳(いっし)の変」で、改新のプロローグに過ぎない。

『日本書紀』など正史は、勝者の立場から都合のよいように書かれたものだから、テロにより無残に殺された入鹿が、極悪非道の人間だったとは断言できない。蘇我氏があった甘樫丘の麓に、入鹿の首塚と呼ばれる五輪塔がある。権力争いに敗れただけで、死ねば仏様だ。近所の方々だろうか、いつも季節の供花が絶えない。

クーデターの翌年、大化の改新の詔が出された。

唐の律令制を模範とした、中央集権国家を目指す新たな施政方針である。公地公民制・班田收授法・租庸調の税制、及びその基盤となる地方制度の整備などが主な内容だ。「容姿端正の采女(うねめ)を貢ぐべし」の条文も見られ、今なら人権侵害と大騒ぎになる。

行政改革を進めるために、五畿七道という行政区分が行われた。五畿は、大和・山城・摂津・河内・和泉で、歴代の皇居が置かれた国々。地方は、東海道・東山道・山陽道・山陰道・北陸道・南海道・西海道の七道に区分し、都と各国府は、同名の幹線道路で結ばれていた。

海道や山道は、国司など政府高官や防人(さきもり)たちの往来、また都に納税する物資の移送を迅速に進める必要から作られたのである。七道には、

ほぼ三十里「約16km」ごとに駅家(うまや)があり、馬・

人足・食糧が常備され宿泊などの設備を利用できたという。九州に、大陸との外交や防衛面から大宰府が置かれていたので、畿内と結ぶ山陽道が最も重要な一級国道だった。総延長が約六千三百餘に及ぶ壮大な官道が、奈良時代に、ほぼ全国に整備されていたとは！

しかし、駅路の建設はすべて手作業で、苦難の連続だった。特に、近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽と続く東山道は、交通の難所が多く峠越えが連続する山道である。『続日本紀』和銅六年「七一二」の条に「美濃・信濃ノ二国ノ境、径道險阻(けんそ)、往還艱難(かんなん)ナリ、依リテ吉蘇路(きそ)をちヲ通ズ」とある。十年余りの年月を要して開通にこぎ着けたのが、当時、美濃守を務めた笠朝臣麻呂(かさのみまろ)であった。

信濃路は今の巒(り)り道(り)刈(かり)りばねに  
足踏(あしふみ)ましむな沓(くつ)履(は)け我が背(せ)

(万葉集 卷十七 399 東歌)

切り株があちこちに残る拓いたばかりの道を、防人に召集されたか、租税を運ぶために、都へ向かう夫を見送り、いたわる妻の歌である。信濃路のどの辺りで詠まれたかは不明だが、長野県松本市と上田市との境を接する保福寺(ほふくじ)峠(標高1,345m)に、この歌碑が建てられている。峠からは槍ヶ岳や乗鞍岳の素晴らしい連峰が眺望できる。明治二十四年夏、保福寺峠に立つた英国人宣教師ウォルター・ウエストンが、驚嘆の声をあげて「日本アルプス」と命名したのはよく知られている。東山道屈指の絶景を望む峠に、万葉歌碑とともに「ウエストン絶賛の地」碑が建っている。

ウエストンは、信濃国分寺址がある上田から人力車に揺られてきたという。私は安曇野から狭い山道を車で登った。そして：絶景に立ちすくんだ。

「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨(そ)ぞぶつたいに行く崖の道……島崎藤村の名作『夜明け前』の冒頭だ。小説の舞台となった馬籠宿近くの神坂(みさか)峠(標高1,569m)が、「信濃路の……」の歌が詠まれた所とする説もある。現在は中央自動車道が、約8.5kmの長大な恵那山トンネルで、岐阜県中津川市と長野県阿智村とを結び、楽々と行き来できる。

しかし、奈良時代は徒歩しかすべがなかった。比較的平坦な道でも、当時の移動の目安は一日に徒歩で五十里「約27km」、荷馬車で三十里だったという。旅は非常に困難かつ危険だったから、現代の観光旅行のような概念は通用しない。旅に出るとき、妻が安全を祈って夫の衣の紐を結ぶ習慣

があり、まさに命がけと言っても過言ではなかった。

遊びの旅ができたのは、おそらく天皇だけだっただろう。例えば、文武天皇(当時19歳)は祖母である持統上皇「56歳」と、牟婁(むろ)の湯(南紀白浜温泉)へ行幸、つまり温泉旅行をしている。大和から紀ノ川に沿って南海道を下り、海に出ると舟で辿ることになる。淡路・阿波国へ続く官道はずれ、南下するには自然発生的な道はあっても、行幸には適さない。熊野古道を通じるのは、平安時代からである。「白崎」「南部(みなごの浦)」など、随行した宮廷歌人が詠んだ歌枕からルートを推測できる。往路だけで二十日かかっているが、風待ちや政情の視察だけでなく、道中、悠然と物見遊山を楽しんだのだろう。

白浜温泉で最も人気が高い「崎(さき)の湯」は、雄大な太平洋の波打ちぎわにある露天の壺湯である。野趣あふれる岩風呂は、万葉の昔のままと伝わるが、さもありなんと納得できる。湯煙に硫黄と潮の香りがたちこめ、波の音を聞きながら、有間皇子も斉明天皇も額田王も中大兄皇子も、この湯に浸かったのかと思いを巡らすのも一興だ。

話は戻って、美濃守・笠麻呂(かさのみまろ)。有能な官人だったらしく、国司の任期を延長され、十四年間にわたって美濃守を務めている。吉蘇路を開通させた功績のほかに、靈龜(れいき)三年「七一七」には元正女帝の美濃行幸があり、行宮(あんぐう)「頓宮(とんぐ)とか離宮とも記される」を準備している。女帝が、当耆郡(たぎのこおり)の多度(たど)山から湧き出す美泉で、手や顔を洗ったところ肌がツルツルになり、足を浸ければ痛みがすっかりとれ、たいへん効き目があった。さらに、飲泉により若返っ

たり、永年の病気が治った者もいたという。

『続日本紀』によると、天皇はたいへん奇麗な方で生涯独身だったが、当時は二十路半はだった。やはり女性らしく滑らかな肌になったと喜び、美容にも気を配っていたのだろう。天皇は「老いを養う」美泉に感謝し、年号を「養老」と改め、翌年にもこのパワースポットに行幸している。親孝行により滝の水が酒に変わった伝説で知られる養老の滝の少し下流だ。ミネラルを多く含む霊泉が、今もこんなと湧き出ており、私も試してみたが、日頃の行いがよくないのか、利益はなかった。

天皇の信任が厚い笠麻呂は、養老三年「七一九」に地方行政を監督する按察使(あせち)として、尾張・三河・信濃の三カ国を管下に置く責任者となった。翌年には、右大弁「中央政權の事務官僚」として帰京し、ほどなく元明上皇「元正天皇の母」の病氣平癒祈願のため出家し、沙弥満誓(さみまんせい)と名のつた。沙弥とは、得度したばかりで剃髪しても妻子のいる在家の僧のこと。満誓はまた歌人としても優れ、七首の歌を『万葉集』に残している。

世間(よのなか)を 何に譬(たと)へむ 朝開き

漕(こぎ)ぎ去(い)にし 船の跡(あと)なきことし

(巻309)

満誓は出家して二年後、元正天皇の勅命を受けて観世音寺の造寺司に任ぜられ、筑紫に赴任した。観世音寺は後に三戒壇の一つになる。朝廷が仏教を手厚く保護するあまり、税を免れ楽な生活しようとして勝手に坊主になる者「私度僧(しどそう)」が続出した。そこで朝廷は唐から鑑真和尚を迎えて、正式な受戒を行える施設を創設した。それが東大寺戒壇院であり、筑前の観世音寺戒壇院、関東の

下野国薬師寺戒壇院「失脚した道鏡が左遷された寺」である。

そして大宰府の地で万葉文化の奇跡が起きる！神亀(じんき)二年「七二五」、山上憶良が筑前守に就任し、次いで大宰帥(ださいのそと)「長官」として大伴旅人(たびと)が西下してきた。六十三歳の旅人にとって、都から筑紫への長旅は辛かっただろうが、正妻・大伴郎女(おおもものいらつめ)や、まだ十歳ほどの息子の家持(かもち)など、家族と一緒にであった。ところが着任してまもなく、妻が亡くなってしまった。

世間(よのなか)は 空(く)しきものと 知る時(とき)し

いよよますます 悲(かな)しかりけり

(大伴旅人 巻5193)

沫雪(あわゆき)の ほどろほどろに 降りしけば

奈良(なら)の都(みやこ)し 思(おも)ほゆるかも

(大伴旅人 巻8163)

大伴旅人(たびと)には、憶良(おくら)や満誓(まんせい)に加え、大宰少弐(すけに)のように、小野老(おの)や、異母妹(いもいもうと)の大伴坂上(さかの)郎女(ら)か(の)うえのいらつめ)などいずれも達者(たつもの)な歌詠(か)み(み)が集(あ)い、華(は)やかなサロン(さろん)が形成(けいせい)された。あたかも都(みやこ)の文壇(ぶんだん)がこぞつて筑紫(つくし)に移動(いどう)したようで、筑紫歌壇(つくしうただん)と呼ばれることとなった。

天平二年(ていへい)「七三〇」正月、大宰帥(ださいのそと)・大伴旅人(たびと)主催(しゆざい)による梅花(ばいげ)の宴(うたげ)で、筑紫歌壇(つくしうただん)は見事(みごと)に開花(かいが)した。

遠(とほ)く都(みやこ)を離(はな)れた大宰府(ださいふ)で、梅(うめ)の花(はな)をテーマ(てま)に詠(よ)まれた三十二首(さんじふに)の歌群(かぶら)を通じて、上質(じやうしつ)な雅(みやび)の世界(せかい)が繰(くり)りひろげられたことを、『万葉集(まんやふし)』は今日(こんにち)に伝(つた)えている。現在(いま)、福岡(ふくおか)県(けん)太宰府(たさいふ)市(し)の特別(とくべつ)史跡(しせき)・都府楼(とふろう)「政庁(せいてい)」跡(あと)は史跡公園(しせきこうえん)として整備(せいび)されている。その一角(いっかく)にある大宰府(ださいふ)展示館(せうしきん)に、梅花(ばいげ)の宴(うたげ)を博多(はくた)人形(にんぎょう)で再現(さいげん)したジオラマ(ジオラマ)が展示(せうし)されていて、

一見(いちけん)の価値(かち)がある。

駿(しる)しなき ものを思(おも)はずは一杯(いっぱい)ひとつきの

濁(にご)れる酒(さけ)を 飲(の)むべくあるらし

(大伴旅人 巻308)

酒(さけ)飲(の)みの大宰帥(ださいのそと)は、酒席(しゆせき)に満誓(まんせい)や憶良(おくら)・小野老(おの)ら、身分(みぶん)を忘れて心(こころ)を許(ゆる)せる親友(せんと)を招(まね)き、歌(うた)を詠(よ)みあつたという。右(みぎ)は讃(ほ)酒歌(さけうた)十三首(じふさん)のひとつである。

やがて、任期(じんき)を務(つと)め終(お)えた旅人(たびと)は、大納言(だんなごん)に昇(のぼ)り進(すす)んで帰京(きけい)することになった。旅人(たびと)の身分(みぶん)からして、往路(おうろ)は陸路(りくろ)・山陽道(さんやうだう)をとったはずである。苦(くる)楽(らく)を共にした大勢(おほし)の部下(ぶか)たちの送別(そうべつ)を受け、帰路(きろ)は舟(ふね)で瀬戸内海(せとないかい)を東上(とうじやう)している。

鞆(とも)の浦(うら)「広島(ひろしま)県(けん)福山市(ふくやまし)」や敏馬(みぬま)「みぬめの崎(さき)」「兵庫(ひょうご)県(けん)神戸市(かんとし)」など立ち寄(とど)り寄(よ)った湊(みなと)にて、旅人(たびと)は亡妻(むしよ)を偲(おも)んで歌(うた)を詠(よ)んでいる。

我(わが)妹子(むすめ)子(こ)が 見(み)し鞆(とも)の浦(うら)の むろの木(き)は

常世(とこよ)にあれど 見(み)し人(ひと)ぞなき

(巻314)

平安期(へいあん)の『延喜式(えんぎしき)』には、「大宰大式(ださいだうしき)だいに以上(いじやう)は陸路(りくろ)をとるべし」という規定(きぎん)があるが、奈良(なら)時代(じだい)はどうだかわからない。山陽道(さんやうだう)を経由(けいゆう)した距離(きょり)はおよそ八百(やっぴやく)に、徒歩(たふほ)で十四日(じゅうじふ)ほど。一方(いっぺい)、舟(ふね)で瀬戸内海(せとないかい)を通(とお)れば風待(かぜまち)ち・潮待(うしほまち)ちを考慮(こうり)して三十日(さんじゅう)余(あ)りらしい。

旅人(たびと)はなぜ海路(かいろ)を選(えら)んだのか？ 老齡(らうれい)が理由(りゆう)の一つ(ひとつ)だったことも考え(かんが)えられる。また、幼(わか)い家持(かもち)は母(はは)を亡(な)くしてまだ日(ひ)も浅(あ)く、心(こころ)は深い悲(かな)しみをひきずっていた。大和(やまと)では経験(けいけん)できない舟旅(ふねたび)は、ふさいだ気持(きもち)を晴(は)らしてくれよう。山上(やまの)憶良(おくら)のように、遣唐使(てんたうし)として海(うみ)を渡(わた)り、先進(せんじん)の学問(がくもん)を身につけるのもよからう。明(あ)るい大海原(おほうみ)を見(み)つめながら

都に帰る旅は、自己啓発のよい機会ではないか。旅人はきつとそう考えた……これは私の仮説にすぎない。

人を愛し、酒を愛し、人生を楽しんだ大伴旅人は、帰京から一年足らずして、奈良の佐保邸にて、妻が待つ黄泉(よみ)の国へと旅立った。従二位、大納言兼大宰帥、享年六十七歳。

## 養生日記

堀江実穂

死んでいく

老人ホームで働いていた時のこと。

お年寄りのお世話をしていると、いつも親切にしてくれて有難う、という言葉をもらう。笑顔で感謝を伝えてくれる。

この言葉を聞くと、私も元気になり、よし頑張るぞという気持ちになる。心の支えになる。

でも、一生懸命にお世話していても、お年寄りの方は順番を争うように亡くなっていく。

昨日、今日と続けて亡くなる時がある。

そうした日々を過ごしているうちに、私の中に人の死が当たり前になっていく。

そのことに気付いた時、自分が悲しくなってしまう。

仲良くなったお年寄りの死が当たり前になっていく私の心が寂しく、悲しい。

妬まれる喜び

グランドゴルフのミニ大会で、前回ホールイン

ワンを出して、私は優勝した。

今回もその気になってプレーしたらダメ。

そう言い聞かせて、気楽に楽しむことだけを思っ

てプレーをした。

商品が出るので、皆闘争心を燃やしている。

皆上手な人ばかりなので、私は参加賞。

前回の優勝はまぐれ。

皆もそう思っていたらうし、事実そうなのだ。無心にマイペースでラウンドできたのが功を奏したのか、二度もホールインワンを出してしまっ

た。

結果、まさかの優勝。

優勝二連覇は、私が一番びっくりした。

優勝トロフィー、優勝賞品、そしてホールイン

ワン商品。凄すぎる。

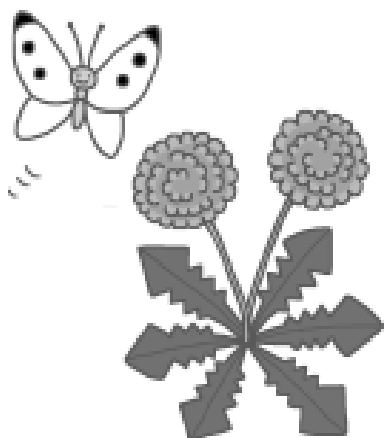
「練習では下手なくせに」

「またまぐれだ」

「調子込んでんじやない」

羨む声、妬むが聞こえてきた。

この私は、妬まれることに喜びを思っていた。



## 《風の吹き・風の嘯き》

風の持ちよう

菅原茂美

私の極楽トンボぶりは、かなりのもの。「幸」という字は、いつ何があつて、どんなにひっきり返ろうとも、やっぱり「幸」である。楽天主義万歳。

人生、気の持ちよう、ゴルフのスコアを100叩いた人が、よくよく失敗を悔やむかもしれないが、今日は調子が良くて100で回れた……と大喜びの人もいるだろう。同じ結果なのに、こころも感じが違う。たった500万円しか預金がないと嘆くか、頑張つて500万円貯め、何か次の目的に大きな希望を持つと喜ぶ人もいるだろう。

人はそれぞれ、その時その時に、これが最善の策と自分で決め、自分で選択し、それに従ったのであれば、例え現情が不如意であつたにしても、悲観などするアホらしさはなくなる。あの時ああすればよかった。こうすればよかったと今更クヨクヨしても始まらない。

15年ノーベル生理・医学賞の大村智先生は、成人の日のメッセージとして『成功した人はあまり失敗を言わないが、人より倍も3倍も失敗している。失敗を繰り返して、やりたい事をやりなさい』と言っている。チャレンジ精神で、万事前向きに進めば必ず前途は開けて来るものと固く信じる。

私はいくら家系とはいえ、3度も強烈な「がん」に見舞われた。若い時に苦労したのだから、せめて老いてからは、平穏な日々を送りたかつたが、これも持って生まれた運命(さだめ)と諦め、そんならそれで、近代医学を信じ、がんと付き合いつつながら、それなりに健康を取り戻し、やりたい事をバンバンやっつていこうと覚悟している。本人が

明るく平然としていれば、家族も心が休まる。

反骨の船

打田昇三

正月に脚光を浴びる「百人一首」の十一番目に「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと

人には告げよあまの釣舟」という一首がある。作者・参議 篁（たかむら）は古代の名族・小野氏で承和三年（八三六）春に遣唐使の副使に選ばれた。正使・藤原常嗣と共に四艘の船で太宰府を出港したが、九州の沖で嵐に遭い日本に吹き戻された。

翌年三月に渡唐が再開されることになり慈覚大師（円仁）の乗船が決まった。遣唐使は学才知識人物器量で選抜されるのだが当時は既に藤原一族の専制時代に入ったようで正使が藤原常嗣の俣で発令された。篁は学問知識才能共に藤原一族には負けない気持ちでいたから心中穏やかで無いところに「嵐で破損した藤原常嗣の船と篁の船とを交換するように」言われた。此処で怒らないと怒る場面が無いから篁は急病と称して自宅に籠り、不平不満を自作の詩にしてマスコミに発表した。

是を知った任命者の嵯峨上皇も怒る場面は此処とばかりに篁を隠岐国へ流罪とした。其の途中で京都の知人宛てに送った歌が冒頭の一首である。此の歌が嵯峨上皇に知れたのかどうか、小野篁は二年後に罪を赦されて都に戻り正五位に復した。此の人は博識の上に第三十代・敏達天皇の子孫を称していたから現職天皇・上皇と張り合ったのかも知れない。豪快な逸話の残る人物らしい。

イスラムの国

打田昇三

キリスト教はローマ帝国などの権力構造に密着して広まったらしいが、それでもヨーロッパがキリスト教化されたのは十一、二世紀の頃である。其れに対してイスラム教はジハード（聖戦）を通して短期間に急速に拡大していった。被征服地では何と宗教の自由を許し、税を納めれば異教信仰も許されたと言う。言うまでも無くイスラムに改宗した者は無税とされたのである。

信仰心など無くても適当にコーランを唱えていれば税金を納めなくて済む—と思つた人物が居たかも知れないがイスラムは単なる宗教では無く「運命共同体」らしい。加入したら制約が多くなることは当然である。先ず「アラビア語（文字）」の使用が強制されたからアラブ圏が拡大した。

マホメッドの死後、三十年足らずの間にアラビア半島のほか、ササン朝ペルシアとビザンチン帝国の領土で有つたイラン、イラク、シリア、エジプトなどがイスラム（サラセン＝アラブ）帝国の支配下に入ったのである。

どの組織でも最初是对立が付きものであるが、イスラム社会も第一次内乱を経て、マホメッドの出身部族であるアラブの名門ムアーウィアが開いたウマイア王朝の時代になった。教団指導者である「カリフ」の地位を、アリー（マホメッドの従兄弟で娘婿）から奪つた…とする見方もあるが、世の中「喰うか喰われるか」であり、此の王朝によってイスラム圏は更に拡大するのである。

アリーを支持するのがイスラム教「シーア派」と呼ばれており、イランはシーア派を国の宗教としてしている。シーア派に対してウマイア王朝に受け

継がれた流派を「スンニ派」と呼ぶ。

アラブ社会は世襲制で無く、一族一門の有能な人材が首長に選任される伝統が有つた。王朝創始者のムアーウィアは徳川家康に似たタイプ of 武将であつたと言われる。強引ではあるが天下晴れてカリフとなつたので、先ず聖地エルサレムで就任式を挙げ、シリアやエジプトの軍勢を率いて首都をダマスカスに置いた。此の都はギリシア・ローマ時代から千年の歴史を持つ。

やがてムアーウィアは長男のヤジードを後継者に指名した。アラブ社会の伝統が破られたので周囲に猛反対が起きたけれども、ムアーウィアは是を「根回し」と「策略」と「威嚇」と「懐柔」と「大金」の使い分けで退け、イスラム帝国の世襲制を実現させたのである。

此の制度の反対運動に「つくつく拘つたのは、当然と言へば当然だが、潰されたアリーの子（マホメッドの孫）アル・フサインである。静かにしていれば「高貴な血筋」として隠居暮らしが出来たのであるが、別な野心家に扇動されて反ヤジードの挙兵を企んだのである。心ある人々の制止を振り切つて、父親・アリーの本拠地であつたイラクへ向かう兵力は百に届かず、目的地には既に数千騎の王朝軍がお待ちしていた。降伏を拒否した一行は瞬く間に討たれ、同行していた幼児三人（フサインの子）だけが助けられたと言う。

此の幼児たちの母親は、ササン王朝ペルシア最後の王の娘とされる。異民族に支配され続けたペルシア（イラン）の国民は此の系統に特別な思いを抱き、十六世紀に興つたサファビー朝（一五〇一〜一七三六）時代に、アリーの系統のみをイスラムの正統とみなす「シーア派（アリー支持派）」

を国教としたのである。

「入院余話」(1)

菅原茂美

この1月末、高級ホテル並みの「無菌室」に、悪性リンパ腫で入院したら超暇。テレビで認知症テーマの漫談を視る。その一部を紹介。

①85歳のおばあさん『わたしや二階に上がって、アレツわたし、何しに来たんだっけ！なんて事一度だつてなかったよ。隣のおばあさん『しっかりしてるね！あたしなんか、しよっちゅうだよ』

85歳『だつてうちには、二階がないんだもの

②信州で育った息子家族が、たまたま里帰り。長い年月、母の濃厚な味噌汁が懐かしい。

息子『アレツ、おばあちゃん、今日の味噌汁、味が薄いね！』

おばあちゃん『アツそうか、味噌入れるの忘れてた！』

③来店のお爺さん『何だッ、このバケツ。入口がふさがっていて、底が抜けてるじゃねえーか』

店主『逆さまに、置いといただけですよ！』

アホらしいやりとりではあるが、新聞歌壇には、

\* 痴ほう症の 妻に晴れ着を着せてやり 喜ぶ見れば 泣いてしまひぬ…とあった。

又、ある日の新聞川柳には、

\* ああ定年 明日から妻が 我が上司  
\* バラに似て 妻は色あせ トゲ残る  
さてこの後の我が余生、何がなにして何とやら…

\*

ベッドに横たわり、Eポッドで、しみじみ大好きな

「鏡五郎」の演歌を聞く。「いで湯の宿」の一節に

♪ 障子の影の虫の音は わたしの胸の忍び泣き

作詞家というものは、こんな機微な女心を歌に

詠む。正にノーベル賞級の文学作品だ。そして、

上州生まれの大前田英五郎が故郷に帰れぬ一節に

♪ 雁の最後は 生まれ故郷の 土になる

鳥でさえそうなのに、俺は故郷に帰れず、こうして、

股旅姿の根なし草…とわが身を嘆く。

私も岩手に帰れば親戚・友人、幼馴染は特に恋

しいもの。何の縁かこの石岡に来て57年。故郷に

何の恩返しもできず、心残りの極み。たまたま盆

に帰ったら、ウチワに墨書で、兄の一句があった。

\* スイミング 鮎もいるけど トドもいる

そこで私も一念発起。川柳の真似ゴト。

\* この俺は 宇宙座標の どこに居る

\* もの書いて 己のバカを さらけだし

\* 今もなお 夢で夢見る 八十路かな

\* ラブレター 書いてはみたが 誰に出す

\* 同級会 あのマドンナが 腰曲げて

\* 頑固爺 犬と猫には 笑顔見せ

\* 寡黙居士 おしゃべり男を 睨みつけ

\* 無言居士 祭りの日には ハッピ着て

\* やれ打つな たまの発言 無言居士

\* 憲法を 換えれば民に 福来るか

\* 平和ボケ 隣は核だ ミサイルだ

\* 異常気象？ オジギ草だけ やたら増え

(大企業の幹部。深々とオジギ草会见連発。)

\* 初ひ孫 見るまで頑張る がん病棟

● 三度も「がん」を体験したが、がんの完治は難しいもの。しかし、早期発見・早期治療で、近代

医学を信じ、常に前向きで付き合えば、例えがん

があろうとも、それなりの人生は送れそう。

抗がん剤の怖さは噂に聞いていた。しかし今日

では、副作用に対応する処置が完璧で、吐き気・

しびれ・発熱・鬱状態など殆どなし。頭髮は抜けるが、これは抗がん剤が体の隅々まで行き渡って

いる証拠。必ずまた生えてくるから、しっかり頑

張ろうね！と、スタツフは言う。

前立腺で3か月入院した折には、患者同士で、

毎日「囲碁」。こんな楽しい日々は無かった。

\* がん病棟 「碁」に明け暮れて 愉快なり。

入院余話(2)

菅原茂美

ステロイドによるハイ・テンション(精神の高

揚状態)は凄い。スポーツや仕事で、強いモチベ

ーションを持つたりすると、夜も眠れなくなる

ほど、気持ちが高ぶる例はよくある事。しかし、

何日も眠れぬほどの興奮続きは、めったにない。

所が、私が最近経験した「がん」治療のための

ステロイド(副腎皮質ホルモン)大量投与により、

気持ちの昂りが、どうにも止まらない。夜中でも

ギンギラギンに頭が冴え一夜平均睡眠時間が3時

間半ぐらいを2週間も続いたが、決してだるさ・

睡眠不足の感がない。原稿書きはドンドンはかど

るし、更に日頃なかなか勝てなかった「囲碁」の

高段者用ソフトに連続勝利。もしかしてオレ、そ

れだけの実力があるのかな…と錯覚を起こしそう

であった。病身なのになんでも直ぐできそうな精

神の高揚。ところがステロイド投与を停止したら

元の木阿弥。あの元気はなにだったのか。ハイテ

ンションは、確かに人間の精神を狂わす。

人間は万物の霊長とか言って、大変高貴で、物質を超えた高尚な精神を持った、特別の存在みたいに思うかもしれないが、なんちゅう事はない。化学物質やホルモンに支配される、単なる物質の塊に過ぎない。甕の中でアルコール発酵みたいなもので、人体の中で酵素やホルモンが複雑に絡み合い、精神活動を支配する。

アドレナリンは高嶺讓吉の発見。副腎髄質から分泌され、ストレスに反応し、心拍数・血圧をあげ、血糖値を高め、臨戦態勢(ケンカ・興奮時)に入ると、血中濃度は最高となる。

一方、これとは逆の作用をするオキシトシンというホルモンは、別名、抱擁ホルモンとも言われ、良好な人間関係を築く。自閉症の人に点鼻投与すると、笑顔で対話するようになり、ケチな人に点鼻スプレーしたら、他人にお金をあげたという実験もある。夫婦共同作業で子育てする動物の基本的ホルモンである。そしてこのホルモンは、オーガズムの時、血中濃度が最高となる。オキシトシンがフル活動で、愛の極点に登ろうとしている男に、悪魔がそっと近づき、アドレナリンを吸入させたら、抱いている女性の首を絞めるかもしれない(趣味の悪いホラー映画に出てきそう)。

高度な頭脳の数学者や哲学者だろうが、刹那の感情で動くミーハーだろうが、人間はホルモンとか酵素などの単純な物質に支配されている。

私は自分のがん治療を、冷静に観察し、第三者の目で、一つの動物実験とみなしている。抗がん剤は人により反応はマチマチ。主治医の、私への治療行為が経験として蓄積され、医学の進歩に役立つならば、真に結構。頭髮が抜けるくらいで、吐き気・しびれ・気持の落ち込みなど副作用が、

まるでない現在のがん治療法開発に感謝。このたびのがん治療は、自らの薬物反応をしみじみ観察でき、私の永遠のテーマ「人間とは何か」を考察する貴重な体験となった。700万年かけて脳味噌を3倍に膨らました我ら人類でも、人間の精神は、ホルモンなど物質により完全に支配される。デカルトの二元論には、賛成しかねる。

今月号で、菅原兄の当会報への原稿が100号となった。100号といつと8年4カ月である。その間に、入院手術と色々なことがあつたが、休むことなく連続100回だからお見事というほかない。当会に自慢するものなどないが、会員全員、毎月休まず書くことだけは自慢できるものだと思う。

### 【特別企画】

#### 打田昇三の私本・平家物語

巻第四 (二・一)

昭和六十年代のことだがイタリアの大学で「平家物語」の講義をされた当時の東京大学教授が居られる。イタリア文学が御専攻だった先生であるが、その方が「叙事詩」の視点から「平家物語」を捉えて次のように述べておられた。

「…平家物語には英雄が三人居ると言われるが先ず前半(の英雄)は平清盛で、真ん中が木曾義仲、そして最後の部分は源義経、その三人の視点で(物語が)動いてゆく…(国文学誌)三人の中に負けず嫌いの源頼朝が入っていないので、本人が知ったら憤慨すると思うのだが、義経も義仲も源頼朝に目の敵にされ

たことを思うと、此の情報は漏れていたのかも知れない。

其の先生のお説のとおり、是までに書いた章段では平清盛だけが活躍をしていたけれども治承四年(一一八〇)になると、盤石であった平家の土台が揺るぎ始め、既に登場した源三位頼政や一部の僧兵、更には源頼朝、木曾義仲、源義経らが平清盛を追い抜くようにして顔を出すようになる。そして翌年には、日本中を掻き回していた清盛爺さんも命運が尽きて源頼朝らを恨みながらあの世へ行ってしまう。

そうなると「平家にあらざる者は人に非ず」などと悪い冗談を言っていた平家も西へ西へと逃げて行くほかは無い亡命者集団に成り下がってしまい、最後には春まだ浅い壇ノ浦で一族が海に潜らなければならなくなる。

そうは言っても平家の意地があるから大黒柱の清盛の死から滅亡まで四年間は踏ん張っていた。それを攻めていたのが木曾義仲であり源義経なのである。伊豆で拳兵し、敗れて房総半島に逃げた

頼朝は、千葉の豪族(平将門の叔父・平良文流)に救われて親分気取りで鎌倉から義経らの武將を監視していただけであるから、学者の先生も評価してくれないのである。以仁王から個々に決起を促された武士団は、法の許では無く令旨の許に平等な訳であるから、頼朝も鎌倉に居座らず平家を追って戦場に行くべきであった。周りから「源氏の御曹司(おんぞうし)嫡流の若君」などと言われたので、その気になって合戦に行くのを避けていたのであるか。現代でも「御曹司気取り」の政治家が多いから、見かけだけ立派で中身は空洞な政治が横行するのである。

それは兎も角、巻第四に入った「平家物語」は平家主体の内容から一転して、其れまでは我慢に我慢



を重ねて来た「隠れ反平家」のグループが、以仁王の令旨を受けて動き始める。その動きと、それに伴ってどちらの側に付くか！を決めなければならぬ。地方武士や大寺院（僧兵）の動きなどに焦点が移る。時の流れと言うのは恐ろしいもので、朝廷を抑え公卿を従え諸国の武士に命令をして不動の地位を保ってきた平家が、源三位頼政の個人的な恨みに起因する思い付きから以仁王が諸国の下積み武士団に冗談で配ったチラスジ（平家打倒の金言）の所為で、不動の権力の座から一転して攻撃対象に落ちてしまうのである。現代の商戦でも一枚のチラスジの効果は大きい。

人間は飽き易いから、何時までも「平家、平家」と言っては貰えないのであるが、それに気付かず自分たちだけが世の中だと錯覚していた平氏一族は、時流に乗って態度を変える諸国の武士団や有力寺院の僧兵たちに翻弄（ほんろう）されて或いは見捨てられ、或いは攻められることになる。

今回の話は、先ず「鼬（いたち）之沙汰」と言う怪しい題名の章段から始まるが、鼬は危機に際して毒ガスを放つという。追い詰められる平家に鼬のような、強烈な秘密兵器が有るのかどうか：臭い話にならぬように気を付けて書きたい。

#### 鼬之沙汰（いたちのさた）のこと

当時の状況からすれば時流が大きく変わろうとしている最中であるから鼬と遊んでいる暇は無いのだが：城南の離宮（せいなんのりきゅう）と呼ばれた鳥羽殿に閉じ込められた俣の後白河法皇は半年も放って置かれたから世情に疎い。何となく不安になって「何処か遠方に流されるのではないか？」と側近の者に

尋ねていた。原本には「幽閉されてから」今年は二年にならせ給ふ」とあるが、計算すると五か月と二十三日にしかならないから明けて二年目に入った、という意味であろう。

その鳥羽殿で治承四年五月十二日、丁度、昼ごろに何処から押し寄せたのか多数の鼬が集まって殿中を走り抜ける出来事があった。多数とは言うが実際には三、四匹しか居なかったと思う。性格が狐か狸のように油断の出来ない後白河法皇でも本物の鼬には驚いたようで側近の者に「鼬出現」を占わせさせた。鼬の行動を人間が占っても意味が無いと思うのだが、言われた家臣は具体的表現を避けて適当に占いの結果を報告した。法皇は鶴藏人（つるくらんど）と呼ばれていた近江守源仲兼を呼び出し「この占いの結果を安倍泰親に見せて、その吉凶などを記録させて参れ」と命じられた：幽閉されている立場でも鼬と遊ぶ余裕のあるところは、さすがに法皇である。

仲兼は早速、陰陽師の責任者である安倍泰親の許に行つたが、生憎と泰親が京都左京区の方に出かけていたので、其処まで回つて占いの判断を頼んだ。

安倍泰親は、鼬が人間には馴染まない動物であるから「縁起が悪い！」と書きたいのだが、其処は陰陽師らしく模範的な返事を書いた。源仲兼は廻り道をしたので帰りが遅くなってしまい正門から入ろうとしたが警備の平氏方武士が入れてくれない。しかし鳥羽殿の様子は良く知っているから鼬のように築地塀（つじべい）を乗り越え、床を這うようにして法皇の居間に近づき床の隙間から安倍泰親の占い結果を法皇に渡した。それには「是より三日以内に、喜び事と嘆き事がある」と書いてあった。良く考えると是はどちらに転んでも当たる回答である。この返事（占いの結果）を見て法皇は「喜び事は良いが、（今は）是ほ

どの身（幽閉中）なのに、またどの様な嘆き事が起きるのであるのか？」と心配そうに言われた。

其のうちに前右大将の平宗盛が、法皇の赦免について何度も嘆願をしていたので入道相国清盛もようやく思い直して五月十三日に鳥羽殿から出してくれたのである。鼬占いの効果ということになるのか：法皇は八条鳥丸に在つた御所（鳥羽天皇の皇后・美福院得子の御所）へ移された。安倍泰親の言う三日以内の喜び事である。

そうした折りに熊野別当湛増から速達便の飛脚をもって「高倉宮の謀反」を知らせて来た。是を聞いた平宗盛は大騒ぎで、福原に居た入道相国に急報したから、清盛は聞くより早く都に駆け戻り「議論をしている暇は無い。直ぐに高倉宮を捕えて土佐の幡多へ流せ！」と命令した。不思議なことに当時の清盛は無官であつたから命令権は無いのだが、公式な裁判を担当する公卿として三条大納言藤原実房が、実務担当として藏人（天皇秘書）の藤原光雅が任命され執行官として源光長と源兼綱が指名された。その源兼綱は高倉宮に謀反を勧めた源頼政の養子であつたから、既に衰退に向かつていた平家側は謀反の実態が完全に掌握出来ず適切な人材の選定も出来ない態勢に陥つていたのである。その様な状態になると、組織が大きければ大きいほど情報が錯綜し、周囲が疑心暗鬼になり指揮系統が完全に機能しなくなる。正に平家危うし、の兆候が始めていたのである。

#### 信連（のぶつら）のこと

戦記文学である平家物語が、ようやく本来の形に

なつてきたのだが、其れに伴つて登場人物も多くなり、舞台も忙しくなつたので章段の題名も思ひ付きで適当に付けたらしく「信連」と言うのは、此の章段で活躍する主人公の名前である。簡略化し過ぎのようだが、正式名称は「長兵衛尉信連（ちやうひやうえのじやうのぶつし）」と言ふ。平家打倒計画に関わつた以仁王付きの武士らしい。兵衛尉は、内裏の中間部を護る兵衛府の尉官に相当する役職であり「長」は苗字である。

後白河法皇御所の「馳騷ぎ」があつた数日後、治承四年五月十五日（旧曆）のこと、高倉宮ごと以仁王は、雲間から洩れ来る月を眺めながら何となく将来の不安を感じていた。其処に源頼政の使者と称する者が緊急の知らせを持つて飛び込んできた。側近の六条亮太夫宗信（ろくじやうのすけたいふむねのぶ）以仁王の乳母の子）が是を受け取つて以仁王に渡すと、読んでいた王の顔色が変わつた。手紙には「平家に対する謀反の計画が敵に知れて、平清盛が以仁王を土佐の畑（高知県西南部）に流す、と言つております。その為平家に命じられた検非違使の役人がそちらに向かいますので、急ぎ、御所を出られて三井寺（天津市の園城寺）へ逃れて下さい。入道（頼政）も、後から参ります！」と書かれていた。こういう場合には誰でもパニックになるが、宮様など全く役に立たないから「どうしよう！」とうろたえるばかりで、頼政の誘ひに乗つたことを後悔したが手遅れである。それに気付いたのは、少し離れた場所に居た宮家勤務の武士、長兵衛尉信連である。

表題に挙げられるくらいの武士であるから緊急事態の対処も手際が良く、「落ち着いて下さい！」と一喝してから「こうなれば、他の手段は無いから早く女装をして下さい！」と、以仁王の髪の毛を梳

（す）き、女性の衣装を着せて、顔には白粉がわりに火鉢の灰を塗り、市女笠（いちめがき）という女性用の笠を持たせて表に連れ出した。側近の太夫宗信が長い柄の笠を頭に差して、鶴丸と言う名の童子が小物を持ち、外見上は身分が中途半端な公卿付き武士が女房を連れて歩くような不自然な恰好で高倉宮を脱出させた。

高倉小路を北に向かつて落ちて行つたのだが、途中では町中を通る。大きな溝があつても以仁王は男のつもりで大股に越える。女装であるから是を見た街の人は怪しそうに見ていた。そこで更に足を速めて通り抜けるから尚も怪しまれる。

何とか以仁王を脱出させた長兵衛尉信連は、自分から申し出たのか命じられたのか、屋敷内を見回つて何人か残つた女房たちを退去させ、余計な物を処分しようとして主の部屋を見ると、王が秘蔵していた小枝という名の笛が残っているのに気付いた。以仁王は危険を冒しても取りに戻るであらうと思つたので、直ぐに追いかけて五、六百メートルで追いつき笛を渡した。以仁王は感激して「もし私が（平家に捕らわれ）死ぬようなことが有れば此の笛を棺（ひつぎ）に入れるように！」と言われた。そして信連に「此の場に戻らず、共に三井寺へ行くように」命じられたけれども、信連は「間もなく、平家方の役人が迎えに（以仁王逮捕）来るのに、誰も居なくては敵も味方も残念なことに思われるでしょう。この信連が御所に居ることは知られていますから今夜に限つて留守にしては夜逃げをしたなどと言われて恥をかきま

す。弓矢とる身（武士）は少しの事でも名誉を惜しみますから、私は屋敷に戻り、寄せて来る役人どもを適当に遊ばせてから打ち破つて参ります」と元氣に言い残し、走り去つて行つた。

屋敷に戻つた長兵衛尉信連は薄青の狩衣（着衣）に黄緑色の胴衣（簡単な鎧）を着け、儀礼用の華美だが丈夫では無い太刀を持ち、然も表門から裏門まで開け放して寄せ手が来るのを待つていた。

そこに予定通り源大夫判官兼綱、出羽判官光長が率いる平家方政府軍三百余騎が押し寄せて来た。

時刻は既に夜中の十二時を過ぎてゐる。先に述べたように源大夫判官は「敵の親戚」なので遠慮？して攻め込まず、何とか理屈を付けて門前に控え予備軍となつた。その分、出羽判官光長は英雄気取りで門内に入り大声で「高倉宮が御謀反との噂があり検非違使長官から逮捕状が出ましたのでお迎えに参りました。出頭して下さい」と叫んだ。すると長兵衛尉信連が縁側に出て来て答えた。

「主の高倉宮（以仁王）は外出中で此処には居られません。それにしても此の騒ぎは何事ですか、説明して下さい」人を喰つたような答えをしたので、相手も頭にきて「ふざけたことを言うな。何処へ行かれたと言ふのだ！」と、検非違使の下役人たちに「其の辺を探して参れ！」と命令した。

是を聞いた信連は怒つて「道理の分らぬ役人の言ひ分であるな。乗馬の俣で（宮家の）門内に入るさえ無礼な振る舞いであるのに下役人に（宮を）探して来い！とは何という物の言ひようであるか！此処に居るのは左兵衛尉・長谷部信連であるぞ。傍に寄つて怪我をするな！（近寄れば斬る）」と寄せ手を睨みつけた。

すると検非違使の下役で、力が強い上に勇敢な金武（かなたけ）と言う者が居て、長兵衛尉を討とうと勇ましく大床の上に飛び乗つてきた。是を見た十数人の仲間も付属に付いてきたので信連は上着（狩衣）を脱ぎ棄てて、持つていた儀令用の太刀（儀礼用でも特

別注で鍛えた太刀)で斬り合った。敵は大太刀や長刀で向かってきたのだが、信連の持つ太刀に斬り立てられて木の葉が嵐に散るように庭へ突き落された。

折から五月十五日の月が雲間から現れて合戦の場が明るくなった。攻め寄せた敵は屋敷内の様子が分からぬ。守る信連は自分の勤務先であるから隅々まで知っている。板廊下に追い落としたり、行き止まりの場所に追い詰めて斬り倒したりと縦横無尽に活躍をした。宣言(逮捕状)を持って居る寄せ手は「なぜ宣言を持つ使者に抵抗するのか？」と言え、信連は「宣言とは何だ？」と、惚(とぼ)けて全く相手にしてくれない。

其のうちに信連の太刀が柄許から緩んできたので、身体ごとぶつかって相手を倒したり踏みつけたりと一人で活躍をして強そうな敵ばかり十四、五人を討ちとつたが太刀の先が十センチほど折れてしまつて、これ以上の戦いは無理と判断したので切腹しようとして腹を擦ると、腰の短刀も落ちて無くなつていた。止むを得ず大手を広げて正面の小門から屋敷の外に走り出ようとしたところ、余計な事に大長刀を持った敵が一人居て向かって来た。信連は、その長刀の柄を踏み付けて(バネにして)脱出を図つたのだが、失敗して何か所も長刀で斬られた。その怪我で動けず、気持ちは焦るけれども大勢の敵に囲まれ、遂に捕らえられてしまったのである。寄せ手の者たちは御所中を捜し回り、結局、重傷を負つた長信連だけを捉えて六波羅(平家屋敷)へ引き上げていった。

平家屋敷では平清盛が簾(すだれ)の内側に居て、その前の大床の上に居た宗盛が長信連を見て庭に引き据えさせてから、それも偉そうに「誠に其の方は(逮捕)行つた檢非違使に向かつて)宣言とは何ぞや、などと言つたのか!その上に逮捕に向かつた多くの者

(下級公務員を傷つけ或いは殺害したのか!それらの行為を厳しく問い質してから六条、又は賀茂の河原(刑場)に引きだして首を刎ねるから覚悟をしておけ!」と言つた。

是を聞いた信連は高笑いをしてから清盛の前でも臆することなく次のように言い放つたのである。

「私が御奉公するあの屋敷に、此の頃夜になると何者とも分らず偵察をしている怪しい者が居りましたので、充分に警戒を致しておりますところ昨晩に武装した大勢が討ち入つて参りました。何者ぞと尋ねますと、宣言の使いであると答えましたが、近頃は山賊や海賊や強盗などが、やれ宣言の使者であるとか何処かの公達(きんだち)高貴な家の子息(ななど)と名乗つて侵入して来ると聞いておりました。昨晩も突然に襲つてきて「宣言の使い」と申しましたので「宣言とは何か」と言つて反撃したのです。生憎と私も昨晩は弱い太刀しか持つていませんでしたので、あの程度の働きしか出来ませんでした。もし切れ味の良い太刀を持つていたならば、攻めて来た者たち全員を無事では返さなかつたと思ひます。

それから宮(主人の以仁王)の居場所は、私の様な下級の武士には分かりません。もし知つて居たとしても本当の武士ならば(私以外の者でも)厳しく責められても言わないと思ひます」

信連は口を閉ざし、後は何事も言わなかつた。それを見ていた平家の武士たちも「あつぱれな豪(こ)者である。あの様な武士が斬られるのは誠に無慙(借し)いことである。と言ひ合つた。その中の有る者が「あれは先年のこと、私が長信連と共に院の御所で勤務していた頃、六人の強盗が現れて其れを大番衆(諸国から交替で警備に当たる武士)が防ぎ切れずにいたところ、長信連は只一人で追い掛けて四人を斬り伏せ、二人

を生け捕りにした。現在、兵衛尉に任官しているのは、其の時の功勞によるものである。彼こそ、正に一騎当千の強者(つわもの)と言ふべき人物である」と言い、他の者も口々に(死罪とされることを)惜しんだのである。このことが平清盛の耳に入ったので、清盛も感ずることがあつたようで、伯耆の国(鳥取県日野郡)に流罪とした。

やがて源氏の世となり、釈放された長信連は関東へ行つた。そして桓武平氏の末流だが鎌倉に土着していた梶原平三景時が源頼朝に従つていたので、信連は景時を通じて事の次第(自分が平家に捕らわれた経緯)を頼朝に報告した。頼朝は「誠に神妙である」と感服し、能登(石川愚)に領地を与えたと言われる。なお梶原景時は、源頼朝が伊豆で挙兵して敗れた際に平家方として追跡しながら箱根山中で見逃がして危機を救い、頼朝に従つて有力な武将となつた鎌倉在任の武士である。

## 《ふる》

アレンジ蕎麦・蕎麦玄席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-43-00000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

## ギター文化館・朗読教室開講のお知らせ

ギター文化館では、音楽院としてギター教室、オカリナ教室を開校しておりますが、四月より新たに朗読教室を開校することとなりました。

講師は、劇団「ことば座」を主宰する脚本・演出家の白井啓治。

舞台表現としての朗読劇の基本を学び、名作物語や詩文、ふるさとの物語やふるさとを賛歌する詩文などを当館の「やさとの丘ホール」で発表しませんか。

朗読劇は、一人での表現のほか複数人での表現もあり、友達や当館の音楽院に学ぶ方達とユニットを組んでの発表を愉しまれるのも良いのではないのでしょうか。

教室は、一教室3名程度。(グループ朗読は5名程度まで)

・受講料=月一回コース：6,000円、月二回コース：9,000円

・教室日は、土曜日・日曜日を除いて応談で決めさせていただきます。

詳しくは、当館池田までお問い合わせください。

(講師プロフィール)

白井啓治=大阪府出身。63年演劇活動を開始。67年映画に転向。69年脚本/演出家として独立。87年～09年まで日本シナリオ作家協会会員。06年ことば座を創設し、ギター文化館を発信基地として朗読手話舞劇「常世の国の恋物語百」に挑戦。現在35話まで進行。

## ギター文化館・音楽院

### =生徒募集のお知らせ=

板一文化館では、ギター教室・オカリナ教室を開校しており、生徒を募集中です。初めての方でも丁寧に指導いたします。ご興味のある方は是非一度ご連絡ください。

音楽院の講師

(クラシックギター)

角圭司、大島 直、谷島崇徳、高野行進

(オカリナ)

小川由美子

教室 月2回コース 一回45分～50分程度

・レッスン料 月額9000円

月1回コース 一回50分程度

・レッスン料 月額6000円

※曜日、時間帯・講師についてはご相談ください。

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628